

## 難波抱節旧蔵『神遺方』注釈書について

清水 信子

二松学舎大学文学部／北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究部

【『神遺方』とその注釈書】『神遺方』は、『医心方』の著で知られる丹波康頼(912-995)が武内宿禰や大己貴命、少彦名命、また諸国の神社、国造、県主、民家に伝わる秘方を集めて撰したとされる薬方書で、文政10年(1827)、和気義啓(小森桃塙、1782-1843)により刊行された。義啓、即ち桃塙は江馬蘭斎、稲村三伯(海上随鴟)に学んだ江戸時代後期の蘭方医で、翻訳に『蘭方枢機』(1817刊)、著書に『泰西方鑑』(1829-34刊)などがある。刊本に付された文政5年(1822)の義啓と同6年の錦小路家丹波頼理(1767-1827)の各序によれば、義啓は『神遺方』を得て、それが「我邦土古神聖之遺方」で「有志医道者不可不読之書」であるが、伝本が少なく亡びることを惜しみ出版を志したという。蘭方医の義啓が本邦の古方を有用としたことは興味深い。そして出版にあたり頼理から丹波家家伝本を借りて校合し、その校異は眉註として記されている。なお、丹波家家伝本とは義啓序にいうその特徴から、現行の『神遺方』とほぼ同内容で康頼の撰とされる『神遺衆古秘法方録』のことと考えられる。また義啓序によれば本書が和文体でも漢文体でもないその文体から偽書とされるが、それは上古の書によくみられることとしてその説を否定している。

江戸期以前の『神遺方』注釈書には、現存が確認されるものに鎌倉時代の医師丹波忠守(1270?-1344?)による『神遺方義解』(1818写)、前出の丹波頼理による文化15年(1818)の講義をその子頼易(1803-1851)がまとめた『神遺方講義』(1844成立)、幕末から明治前期の医家で国学者、神道家としても活動した権田直助(1809-1887、号は名越廻舎)による『神遺方経験抄』(1851成立)と『神遺方講義』、および『神遺方抄伝』がある。いずれも出版されたものはなく、伝本も少ないが、権田直助による注釈書はいくつか諸方に伝わる。直助もまた『神遺方』を江戸時代の偽書と考察するが、偽書であっても所載の薬方には見るべきものがあるとして、それを周知するべく注釈書を著したという。このほか、江戸時代後期の漢蘭折衷医難波抱節(1791-1859、名は経恭)の旧蔵書に『神遺方』と題する注釈書があり、これまで知られていない新出資料として紹介する。

【難波抱節旧蔵『神遺方』】難波抱節は、備前で医業に従事するとともに家塾思誠堂で多くの門人に教授した人物で、その蔵書の多くは現在武田科学振興財団杏雨書屋に収蔵されている。旧蔵書の中には抱節の書入のある『神遺方』刊本も残されている。その書入は万葉表記の本文に対し朱筆で漢字表記を傍書し、また諸家からの引用で、各巻巻頭に「難波恭子敬傍注」と明記されている。抱節もまた漢方蘭方を基本としながら、和方にも関心を持っていたこととして興味深い。その要因については地域性や時代背景などを含めまた別に考察していく。

新出の注釈書は、表紙として刊本に付される見返しが綴じられた仮綴の写本である。著者事項は明記されていないが、巻頭に本注釈書の由来を記した前文があり、その末に「天保十二年九月 平直入」とあることから、平直入(詳細未詳)と察せられる。万葉仮名を交えて記された前文によれば、はじめ直入の友人伝浦道根が本書を世に広めたかったが暇なく、代わりに直入が諸伝本を校合し、また当世の人のために難解な語句に注釈を加えたという。なお本注釈書の本文と刊本『神遺方』の本文には異同があり、その校異も記されている。変体仮名交じりのくずし字の和文で表記された注釈には和古方特有の用語、各薬方等について考証し注解している。末には万葉仮名で表記された和名の薬名に漢名を付した便覧が付されている。注釈については今後さらに内容を精査するとともに、他の注釈書と比較し特徴等を検証していく。

(本発表は、公益財団法人武田科学振興財団2015年度杏雨書屋研究奨励「近世後期における医家の学問に関する基礎的研究—難波抱節旧蔵資料を中心として—」による研究成果の一部である。)